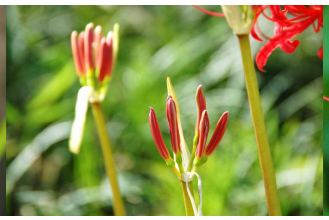
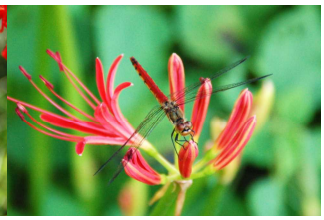
ヒガンバナの生活戦略

佐野高校の前庭に咲くヒガンバナ　２００９．９．２１

毎年、**秋の彼岸の頃**になると一斉に開花するヒガンバナ。気象庁では、桜などの花が開花した日（開花日）、アキアカネなどの動物の姿を初めて見た日（初見日）のように植物や動物の状態が季節によって変化する現象（生物季節現象）を毎年観測しており、ヒガンバナについては全国２５の気象台がその開花日を観測している。

各地の気象台が観測した今年のヒガンバナの開花日の一番乗りは、岡山の８／２５（平年よりも２１日早い）、続いて前橋の９／８（平年よりも９日早い）とかなり早めのようである。残念ながら、宇都宮地方気象台ではヒガンバナの観測は行っていないが、今年は佐野でも彼岸のだいぶ前からヒガンバナが咲いているのを見かけている。

ところで、**ヒガンバナの開花**はいつも突然である。それもそのはず、この時期のヒガンバナには葉がなく、地面からいきなり花茎が顔を出すのだ。花茎は１週間くらいで３０～５０ｃｍに伸び、おもむろに開花するのである（↑上の写真：葉はないことに注目！　↓下の写真：地面から伸びてくる花茎）。だから、気がついたときにはすでに咲いているのだ。一週間ほどの花期が終わり、花と花茎が枯れると、今度は根元から葉が伸びてくる。そして、冬の間にせっせと光合成をして球根に養分を蓄えるのだ。やがて、春が終わる頃にはその葉も枯れてしまう。その後は、次の開花（彼岸の頃）まで地中で休んでいるのである。

ヒガンバナは、花期に葉がなく、葉の茂る時に花がないので、「**葉見ず花見ず**」とも呼ばれている。ライバルたちが枯れている冬に独占的に太陽の光を享受し、競争が激しい時期には休んでいるという独特の生活戦略を展開しているのだ。実にみごとな戦略ではないか。